



第 24 号
1972. 12

書評

編集・発行
関西大学生協同組合
組織部
「書評」編集委員会

吹田市千里山東3-10-1
TEL 388-1121
内線 776

- 書評
- 6 「ゴッドファーザー」
—— 民族問題をスリヌケタ
民族モノのハードボイルド —— 末吉 栄三
- 10 「常民への照射」
—— 常民と常民に肉薄しうる人々 —— 河口 純一郎
- わたしの研究ノートから
- 14 日中文化関係史の一面 (VI) 増田 渉
- 17 ヘーゲル詣で (III) 中 埜 肇
- 2 ■ 巻頭言 市原 亮平
- 19 ■ 編集後記

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

題字は網干善教文学部助教授
カット写真は「ロングラン・ゴッドファーザー特集」より

新重農主義への接近

—計画生育・生態・生産の必然性について—

(一)

昭和三〇年頃の高度経済成長の表面上の成功は、一九世紀イギリスで流行した国際分業の見地よりする農業無用論に近い思考を日本でも繁昌させた。都留重人氏のような一流のエコノミストでさえ、農業生産をアジアの発展途上国に割愛し、これら諸国から第一次産品を移入して、加工型日本貿易の片面性を是正すべきであると主張する程であった。昨今は外貨減らしのために、何よりも農産物輸入を拡大せよという主張に妥容しているが、これも一種の農業無用論であらう。

しかし一九世紀末以来、先進国は一樣に農業保護を基本政策とし、食糧自給度を高めてきていることは周知である。加えて現在地球全体が寒冷期を迎えつつあると言われており、緑の革命が論じられ食糧過剰が喧伝されて、過去の幻想は醒めつつあり、「二年後の大飢饉に誰も気付いていない」といわれる。(ポロログ、ポルグストロウム)「二年後の大飢饉に誰も気付いていない」中央公論、経営問題秋季号を見よ)この二人のノーベル賞学者の「水も肥料も不足し世界の終りがやってくる!」という警告は、ローマ・クラブのレポート等反成長の破局論と合して宇宙船地球号の命運を暗示するかに思われる。国民食糧の安定的供給ということ——戦争による輸入の途絶というマルサスの配慮に立つ食糧自給論を含めて——はむしろ地球号上の食糧供給力の悲観論によって深刻化してきていると考えられ、加えて公害列島日本の農業には特別にエコロジーの観点よりする(緑)の供給や、工業と比較してその生態系としての浄化能力が強張されもしている。要するに、低開発国の人口爆発と地球の食糧供給能力の限界と宇宙船の環境悪化とは、国際分業論にもとづく農業無用論——一部為政者の農村人口削減論や米の減反政策の背景にある——をアナクロニズムと化せしめているといえよう。

ところで日本農政に欠如している危機感を、政権の命運をかけるほどに促進化している国がソ連であり、穀物不作の責任を問われて白ロシア共和国農相が解任されたのにつづき、ブレジネフ党書記長が自ら(穀



巻頭言

倉ヶカザフ共和国に飛ぶなどのことが起きて、農業危機の再来を思わせている。由来、農業はソ連経済のアクセラシオンといわれ、フルシチョフ前第一書記が失脚したのも、華やかな共存外交の影の深刻な農業不振が決定的な要因としてあったといわれる。フルシチョフ時代と比べ、かなり上向き状況にあったといわれるソ連農業がブレジネフ農政の下、再び米囤から大量の穀物を買付けるにいたったことの要因は何か？これは全て昨年から夏にかけての、異常気象による大規模な冷害と干魃の発生という一時的な原因に帰せしめることができるかどうか。この寒冷農業の危機状況を地球号上に普遍化すると、ボルグストロウム流の「飢餓遊星」論となるのは見やすい理。事実ボルグストロウム・ミンガン大学教授が、自らの「飢餓遊星」からの危機回避の手段をソ連ではなくて、中国にもとめてるのは示唆的である。

彼は言う。「この問題をこなそうと真に試みた国があります。中国です。五〇年代の都市集中が目ざましく、全体制の均衡が破られようとしたほどです。そこで都市への人口流入を強力に抑制し、一〇〇万ないし二〇〇万の人間が地方へ送られ、そこで活動の機会を作ったのです。彼等はダムを作り、道路を作り、欧米で軽蔑の意をこめて「青い蝶」と言った、あの人達の力で村落も田畑も改良されたのです。戦争という手段に逃れずこれを行ったことは正に敬服すべきことです。その結果中国は中国式に合理化された農業を持ち、人々はフルに土地の耕作に向けられ、都市問題を起こさずに済みました。もつともこの状態は現在の人口増加が続けば、いつまでも安定しているわけにはゆきません。」

(二)

農民からの土地収奪とプロレタリア化過程を特徴とする「資本論」中の資本の原始蓄積の概念は、「新しい経済」の著者、ブレオブラジエンスキーによって利用され「社会主義的原始蓄積」なる概念として拡張・適用された。この概念はブハーリン「過渡期の合法性に関する問題に寄せて」中に次のように批判されている。「六年前の一九二〇年に私は『過渡期経済論』（第六章）の中で『社会主義的原始蓄積』という用語を用い、それに注意書きして『ウラジミール・スミルノフ（民主的中央集権派のエコノミスト）が言い出した用語』というふうにつけ加えた。これに対してレーニンは次の評註をもって反対した。曰く『そして極めてまずい（用語）、大人の使った用語をまねる子供の遊び』と。レーニンの言うように、『社会主義的原始蓄積』の概念が『子供の遊び』であるならば、ブレオブラジエンスキーの『法則』もまた同じカテゴリーに入ることを想像するのは困難ではなからう。」私はブレオブラジエンスキーに同意はしていないが、ソビエト農業が国民経済のアクセラシオンでありつづけること、革命後実に五〇年余という事実からして、今日の農業危機をも、宇宙船が冷えていることや寒冷地農業の異常気象ということに解消できないことを示していないか？

内田義彦氏の「経済学の生誕」なる名著によって私はスミスの国民経済近代化の経済論理を次のように

読む。「自然」の秩序では、つまり、資本投下を攪乱する要因のないところでは、まず農業に資本が投下され、農業生産力の増大にとまらぬ農業剰余を、素材的、ならびに市場的基礎として工業がおこり、これが更に農業に対して市場的、素材的基礎を提供することによって農業へのより一層の資本投下を可能にするというふうに、農、工の国内市場を豊かに形成しながら、農業から工業が（そしてその過程で農村から都市が）分化し発展する。そして局地的市場圏の国内市場への拡充の基礎上で商業が分化し、このように、市場形成とストックの投下の順序が、農↓工↓商の場合、富裕な国民経済が自然的に進行するのであり、国民経済の富裕化は「自然もともに労働するところの」農業を基礎とし、その農業制度は商業よりも工業に用いられる方が更に剰余の量が大きく自然の進行に適合する。

中国の計画経済建設は、五三年に始まるソ連流の重工業優先主義の第一次五カ年計画から、第二次五カ年計画（五八〜六二年）の中国式農業重視経済開発へと転換した。基本的には「農業を重視しつつ工業を開発する」という毛沢東以後の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」、あるいは「十大関係論」等で提示した農工併進論を根幹とするものである。人民公社を設立し農村労働力を集団化し、集団化された労働力によって生産性を高め、農業部門の蓄積を強め、工業部門の蓄積を強めて、工業部門への購買力をつける、というものである。具体的には、労働集約的農法や地方小工業生産様式が大々的にとりあげられてきた。この「農業基礎」論は中国では用いられていず、普通「農業は国民経済（発展）の基礎である」、あるいは「農業を基礎とし、工業を導き手とする」という表現がとられている。言うまでもなくこの「農業基礎」論は、五三年に始まるソ連式社会主義工業化が、農業を犠牲にした極端な重工業優先開発を採ったのに対比させられていたのであり、私がソ連型社会主義化を「社会主義的原始蓄積」と特に表現する所以でもある。

「農業基礎」論はすでにみたように、スミスの国民経済近代化の論理にも適合した有力な工業化の理論として、普遍的真理を含むと私は考えている。農業の発展と工業の発展とが相互に関連しあっていることはいうまでもないが、農業基礎とはどのようなことなのか。スミスの論理に見られるように工業先導を前提とし、農業はその剰余労働によって国民経済発展の基礎になるということなのである。すなわち、工業発展に必要な労働力およびこれが必要とする食糧等が増大するには、農業部門での剰余労働が存在しなくてはならず、また逆に、これが十分存在することによって工業の発展も保証される関係にあり、工業の剰余がまた商業部門の発展を保証するのである。要するに、工業等すべての部門の発展する条件は農業によって、就中、農業部門の剰余労働によって与えられているというのが、農業基礎論の含意するところであり、これはソ連のエコノミストの首導したインダの混合経済開発方式が戦後失敗して後、発展途上国の普遍的な開発方式とならんとしている。

農業基礎論と相反したソ連の社会主義的原始蓄積論の実態は、本学佐藤博教授の力作「ソビエト財政論」が側面から示唆を与えている。

私は四二年四月に一月月程ソビエトに招かれ、とくにコルホーズの実態に強い関心をいだいて視察す

ることができた。私は革命後五〇年余、その重工業化の成功と表裏しての、ソビエト農業のあまりの停滞性と難行性について深々と考えこんだ。農業きりならぬ農業犠牲性の軌道上で社会主義的原始蓄積が展開され、重工業化が上から強行推進された結果の負債が余りにも大きく、ソビエト農業を大きく抱束する生懸的諸条件が深刻に破壊されたのではあるまいか？ 私の脳裡にはかつて読了したことのある、エニイド・チャールスの、伝来の自由主義経済は生態面に人間を自己破壊に突きおとすメカニズムである、という見地からする《計画生態》の新概念が計画経済と不可分に要請されるという主張が閃光となってひらめいた。(Enid Charles, The Menace of Under-Population, A Biological

Study of the Decline of Population Growth, London, 1936) ソ連がエジプトを援助したアスワン・ハイダムはこの《計画生態》からいうと失敗である。——海岸線の浸食、イワン漁の激減、灌漑地における寄生虫の多発、ナイル流域の土地肥沃度の激殺等々。おそらくソ連農業は《計画生態》の見地からの危機打開に今後取り組まざるを得ないのではあるまいか？ 冬季オリンピック開催のため犠牲となつた患庭岳の自然の完全治癒には今後、しつと百年を要するというが、ソ連農業が拡大再生産の計画経済の軌道に乗るには今後農業生態系治癒のため何十年もの歳月を必要とするだろう。

計画経済と計画生態、そして計画出産、これらは社会主義社会の不可決の三本柱になるであろう。計画生産——中国生育計画の理念と実際とを見た寺尾琢磨氏はこれを世紀の大実験と称している。これを「マルクスよりもマルサスを愛する中国」と書くのはドグマであろう(吉田忠雄「生と死の未来」第三章)。現にエンゲルスも言っている。——「人間の数がその増加に制限を加えねばならぬ程多くなるという抽象的な可能性は、たしかにあります。しかし、ひとたび共産主義の社会が、それがすでに物の生産を規制したと同じく人間の生産をも規制することを余儀なくされるとすれば、しつとこの社会こそ、そしてこの社会のみが、それを困難なしに実行する社会でありましょう。現在すでにフランスや北オーストリアで、自然発生的に無計画に発生している結果に、共産主義社会で計画的に到達することは、私には全然困難なこととは思われません。……それに私はすでに一八四四年の『独仏年誌』にこう書きました。『マルサスが全然正しいとしても、この社会主義的な改革には直ちに着手せねばならぬであろう。なぜならば、マルサス自身が過剰人口に対する最も有効な処置だとして最も容易な処置だとして生繁殖の道徳的抑制は、ただこの改革によつてのみ、ただそれによつて与えられる大衆の啓蒙によつてのみ可能にされるからである。』」(一八八一年二月一日付カウツキーへの手紙より)

向後、おそらく両体制の平和的共存過程での体制優越性の基準は、既往の生長比較から民主主義比較へ、更にこれを前提にした計画生態と計画出産とを二つの柱とした環境価値(公害克服)へと基軸移動をおこなうというのが、私の歴史への透視なのである。

(経済学部教授・市原亮平)

ゴッドファーザー

マリオ＝ブツォー著
一ノ瀬直二訳

末吉栄三

1° 「書評」誌の編集者にその書評を依頼されるまで、私はこの「ゴッドファーザー」なる小説……いや、それがいわゆる「小説」かどうかも知らなかったから、正確にはこの「本」といつた方がいいかもしれない。何らの特別な興味も持っていない。もともとその映画がかなり好評らしい事は何かの週刊誌で読んだ事があって、その評によると好評の大きな原因のひとつは、「すべての人間関係においてその疎遠さが自立つ現代社会において、この映画に出てくる様な強烈かつ親密な人間関係（特に親子におけるそれ）が多くの観客にある感動を与えずにはおかないのだろう」。

という様な主旨の事が述べられていた様に記憶している。私はこの週刊誌の映画評をほとんど読み流しにした。特別心にとまる事は何もなく。それだから何か書いてみてくれとの依頼を受けた時も最初はかなりオタツイタ。私は「現代社会における親子関係」などという事をしゃべれるガラじゃないし、それに「マフィア」なんてコトバにしたって「アル・カポネの親戚らしい」とか、「いやちがう、彼の組織の事だ」とかいう話をどこかで聞いた様な記憶があるだけで、要するに全く何も知らないのである。私がこの本を読んでもみる気になつたほどと唯一の理由は、編集者が「民族問題」を口にしたからであり、しかも彼は私が沖嶺人だという事、さらに正確に云えば、日沖嶺人だという事を知つていてこの本の一読を勧めているのだと知つたからである。

2° 当然の事だが、少なくとも現代の社会において「民族」や「人種」

等の問題に多少なりとも関わりのある内容を持つ文字やその他もろもろの表現行為において、作者がどの「民族」「人種」に属しているのか、「生れ」、「育ち」そして現在の「国籍」はどうか……等々は決定的に重要な意味を帯びている事は論を待たない。「ゴッドファーザー」の作者マリオ・ブツォーという人の生れ・育ち・国籍等々は訳者の「あとがき」にも記されていないので何とも云えないが、ただその「あとがき」によるとこの作品の前作の（幸運な巡礼）は「ニューヨークに住むイタリア系市民を描いてこれほど強烈なものはない」と評されているそうだし、「すでにニューヨークのイタリア系市民については熟知している」とも云われている（それは「ゴッドファーザー」一冊を読んだだけでもある程度うなづける）というから、作者自身もイタリア系アメリカ人なのかもしれない。そして彼がイタリア系アメリカ人（あるいは少なくともそれを天近似的位置にいるらしい人）だという事はこの作品に色濃く影をおとしている。例えばイタリア系アメリカ人の多くの人達が他のアメリカ人（白人）から歴然たる差別を受けている事、そしてその結果としてその人

運の生活は貧しい状態に置かれている事等を多くの箇所でかなり鮮明に描き出しているにもかかわらず、その同じ作者が「黒人」や「ハーレム」に関して述べる時の語り口は、無数の白人作家達が、それが当然の事の様に露骨な差別意識に満ちみちた表現をくり返すのと全く同じ口調になる。彼もやはり、「白人」なのである。それは例えは、地中海をはさんでイタリアとは対岸の關係——位置——にあるはずの国、アルジェリア人、フランス・フアンシ（彼もいってみればアルジェリア系フランス人とでも呼んでよい生活を強いられていた）等の意識——精神構造——のありようとのあまりの落差に驚かされるほどだ。ついでに云っておけばこの本は一九六九年に発売されて「発売後の六ヶ月はベストセラーのトップをつづけた」（訳者あとがき）という。U・S・Aでベストセラーのトップが何部ほどになるのか全く解らないのだが、さらにハリウッドで映画化されるほどの人気を支えたのは当然の事として他の同様なコースをたどった作品同様、U・S・Aの「白人」読者であつたはずだ。

民族問題をスリヌケタ

民族モノ的ハードボイルド

3。 「イタリアには古くからコモラとマフィアの二つの暴力組織があり、コモラはナポリとシシリ島で一八〇〇年代の初めから知られ、その勢力の盛んな時にはナポリを完全に支配したといわれる。しかし一九一一年にその主要なメンバー四〇人が処刑されて活動が終るがそれはこの組織がピラミッド型であつたため頭部がやられて終熄したのであつた。ところがマフィアの方はやはり一九世紀からイタリアのシシリ島で活

なかつたためだと思われるが、さらに彼等がアメリカに渡つたのも必ずしも弾圧を逃れるためばかりというより、アメリカの広大な「市場」性の故と考えるのが自然だろう。さらにオモンロイ事には連合軍がカツソリーニとヒットラーの軍隊に勝利してシシリ島を手に入れた時、「フアンシ」政権に捕えられていた者はすべて民主主義者であらうと錯覚したアメリカ軍政府の役人は、これらのマフィアの多くを村長とか軍政府の通訳とかに

は各グループにわかれ、それぞれのグループが独自の結束と活動をしていた故にカツソリーニの弾圧をきえかいくくり生きのびたという事は、強大な権力に対抗する場合の組織のあり方として最も基本的な条件として認識されるべきものである。これは私達の日々の小さな闘争や実践においてさえイノイチパンに踏まえなければならぬ事で、安易にレンタ車を求めたり、クツソイチャット大きくなることばかりを考えていると肝心なところ

5。 マフィアの「ファミリー」と呼んでいられるのであつた。この手の誤解が世界中で数多くあつたであろう事は、米軍を「解放軍」と規定した「共産党」が存在した程の時代だから想像にたかない。

4。 コモラがピラミッド型組織だつたが故にその頭部をやられる事によつてつぶされたのに対し、マフィア



動する。従つてすべての行動は自己のファミリーにとつて利益になるかどうかで判断されるべきで、「國家權力」という名の全く私的な——非常に強大ではあるがいずれにしてもその本質において私的な——權力をも含めた他のいかなる權力の爲にも自分達の生活、力、行動等々の微塵な部分にしろ割り当てる事は全く無意味な事なのである。例えば多くのイタリア系ニューヨーク市民から「ゴッドファーザー」と呼ばれ尊敬されているこの物語の主人公ドン・コレオーネはその三番目の息子が第二次大戦が勃発すると彼の命令でそむいてアメリカ合衆国の海軍に志願した時も、彼は「彼にとつて異

國と言へる軍隊に末の息子を入隊させ戦死させる気はもとより」(傍点末吉、以下同様)なく、入隊を阻止すべく大金を投じたりするし、彼の努力にもかかわらず息子が入隊し海軍大佐に昇進し数々の勳章を受け、「一九四四年には彼の武勲を示す写真と共に彼自身写真がライフ誌に掲載」した時も彼は「苦々しげに」こうつぶやくのである。「あいつは一家のためでなくよ、者のために勇敢にやつておる」と。つまりドン・コレオーネにとつては「國家」などいかなる意味においてもよ、そ者でしかないのである。全くよくミ、エ、テ、イルのだ。おそらくこれは「國家權力」にとつては最も「危険な申種」で

あり、このアタリマエのコトが多くの人にミ、エ、テ、しまったらモトモコモなくしてしまふことになるのである。だからこそコーアンはそういうミエテしまった人達を付け狙うのだし、なんのかのとでつちあげてその様な人達を監獄にぶちこむ事によつて多くの人達にミエテしまう事が拡がるのを必死に阻止しようと企てるのだ。さらにもうひとつドン・コレオーネが國家權力をはっきりと「よそ者」の権力と見なしている典型的なエピソードがある。ある男——彼はイタリア系アメリカ人だが「アメリカを信用し」自分は「アメリカのおかげで財産を築くことができた」と心底思つており、娘も「アメリカの流儀に従つて」育ててきた。ところがアメリカ人の二人のボーイフレンドに暴行されて、彼は「アメリカの善良な一市民として」警察にゆき裁判にかけたが、二人の若者が執行猶予にされた——がゴッド・ファーザーに「公平な裁きを受けに」やつてくる。ドンはそのもとにやつてくるすべての依頼人の頼み事や心配事を、その事の大小、難易にかかわらず必ず解決してやるのだが、この男に対してははっきりと拒否の態度を示す。「しかし、あんたはどうして警察に行つたんだ?初めから私のところにくることもできただろうに。」つまり話は簡単なものだ。なぜ「よそ者」の権力にすがりに行

つたのか。なぜ初めから自分達の権力に解決を求めなかつたのか。より強大な権力(とその男が考えた)の方に身をすり寄せようとしたその小賢さにドン・コレオーネは我慢できなかったのである。6 ハードボイルドと称される型の小説を私はあまり読んだ事が無い。どうも自分の生活に關係が薄いようであり興味を持ってないのだが、これは読まずにずいとの偏見かもしれない。ゴッドファーザーという小説がそのハードボイルドものなのかどうか、それ故しかとは判断できないがどうもその様な気がする。そういうところがこの小説を一気に読み通させる理由のひとつであろう。とにかくA四版五〇〇ページにも及ぶ大冊なのにならなりスラスラと読める。全巻は九部から成り、コレオーネファミリーやその周りの人々の生活やその動き、ファミリー間の戦争などが克明に描かれていり、私は特に興味を持って読んだのは、最終的にドン・コレオーネの後継ぎになる彼の末息子マイケル・コレオーネが彼のファミリーの敵とその男と組んでいる警部を射殺した後の逃亡地であるシンシリー島が舞台になる第六部である。「マフィア」という言葉がそもそも「隠れ家」を意味するものであつた事、それが「その後、何世紀にもわたる歴史の推移のうちに、この地方の人民を弾圧する



「書評」モニター募集 〔20名〕

「書評」の内容を更に広く深くするために「書評」に対する意見を述べてくれる方をモニターとして募集いたします。折り込み用紙に記入の上、応募して下さい。

(係より)

支配者に対抗せんがために生まれた秘密結社の名称となっていた事。「歴史的にみてシシリーほど様々な弾圧を受けた土地は」なく、その凶暴な弾圧に対して苦しめる人々はなんらかの救いを求めてマフィアのもとに行き、マフィアの方もその様な人々の要求にある程度応じてきた事。それが昨今では富豪のガードマン的役目をすら果たすようになり、「それは反共産主義、反進歩主義を旗印にしたダラックした資本主義的組織」にまでなってしまう事などのマフィアの歴史的变化やシシリー島との関係が説明されているし、また、マイケルが「シシリー人の信じ難いほどの貧困ぶりから全く不毛の地

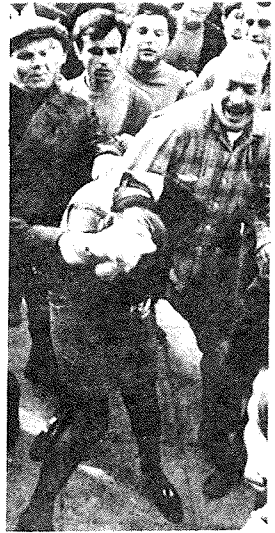
を想像していた」そのシシリー島が、実は様々の果樹や一面の花々に色どられた「豊潤そのもののような土地であった」事。そしてマイケルに「このエデンの園かと思まごうばかりの土地から大量の住民が他国へ流出している事実は、彼らがそれまで受けてきた困苦がどれほど苛酷なものであったかを」教えるのである。いつの世でも(当然今の世もそうだが)支配者―差別と収奪をほし、いまにすゝる者―はある土地の人々の生活の貧しさ、苦しさをその土地のせい―その土地の地理的あるいは気候的条件等々―にして自分の差別と収奪を隠蔽しようとする努力をはらうものだ。私達の身

の周りにその様な事実は数え切れないほど存在している事は今さら例を挙げて説明するまでもなからう。マイケルはこの島でシシリーの美しさの化身の様な娘に一目ぼれし(シシリーでいう「稲光」に打たれ)結婚する。それは彼がどうしようもなくシシリー島にシシリー人―一気にのめり込んでいく過程と重なりあっている。二人は初夜以来夢の様な新婚生活を―それは当然夢の様なセックスを軸としたものであるが―送るが、それもその絶頂で敵のファミリーの攻撃により一挙に破壊する。彼はその心の奥底に確実に「シシリー島」を彼女そののひとよって刻みこみ、そしてシ

シリー島を離れるのである。
7° せっかくだから映画の方もぜひ見ておきたかったのだが、その時間がとれなかった。えらくマトをはずれた書評になってしまったかもしれない。やはりハードボイルドもの(あるいはその様に読むべき部分)に関する評者としては、私はいちじるしく不適当な人間だったかもしれない。

(評者は工学部助手、
すまじ・えいぞう)

△早川書房・一〇〇〇円▽



谷川健一 著

「常民への照射」

常民と常民に肉薄しうる人々

△はじめに▽

「俺たちが斬ったり、斬られたりして
いるなかで、百姓は種子を播くことをわ
すれていなかった。」常民へ接近と
いう場合、このことが問題にならないか
ぎり、すべては無意味である。私はこの
言葉が示す世界の重さを共有しうる者た
ちを対象化しようと思う。またこの發言
は、近代の混沌の中で発せられたが、近

代をみつめる一つの総括となつてはいな
いだらうか。

民衆の独自の心情と論理に、簡単にわ
けることが困難であることは民俗学が
示している。私達が民衆達に近づく場合、
自己矛盾の転化によつてもち上げたり卑
下したり、という形を多くみてきた。し
かしあくまで民衆は、私達にとつては、
〈他者〉である。私達には〈私〉と〈私
自身〉の關係を通してしか〈他者〉は現

河川純一郎

われてはこない。たとえば敗亡者たちが
どれだけ自らを知っていたかによつて、
〈百姓〉との關係が表現されるのである。
〈百姓〉は自らを〈文字〉によつて表現
することはしないが、自己の利益にしか
〈善〉がないことを知っている。もつと
もよく耐える〈百姓〉は、あるときはも
つとも過激であつたことが、彼らをもつ
ともよく表現しているのである。私はこ
れらの民衆の日常のサイクルにこそ、或

種の普遍性があるのではないかと思っ
ているが、それは私自身の対象化を通じ
てなされる質のものではないだろうか。
とりあえず、ここで言っておかねばなら
ないことは、私が民衆を絶対化しようと
するものではないことである。

△近代化と敗亡者たち▽

さて、私は本書から「近代」とは何だ
つたのかという問題を引き出そうと思つた。
この問いは本書の全体をとおして横たわ
っている。著者谷川氏は、明らかに近代

日本が生み出したものの空虚さと、それが暗黒たる部分を残していることを意識している。それらは近代の発生時までのかぼることのできる根源的なものできえる。私は近代日本が生み出した空虚さや暗黒たる部分として現代的に現われる諸矛盾を近代日本成立の混沌と定式化の中にその根源的要素を見ることができると考える。だからこそ著者は「明治」にこだわっているのであろう。谷川氏は本書のある章「維新変革の虚妄と反乱者たち」の中で、明治維新の変革の一応の帰結点を服部之總の見解をとりながら自由民権運動の終焉におく。その理由を維新の変革に幕末から挺身してきたものたちが、明治新政府の誕生直後から、政府の政策に失望を重ねざるを得ず、それがやがて反政府行為となって不満を爆発させてゆく過程……」の中に「維新の変革はまだ成らずという情念」があり、それが自由民権運動までつづいたとみえることにおいでいる。この自由民権運動の終焉は新たな秩序の定式化である。

私たちがここで興味をもつのは、秩序の定式化に対して反乱するものたちは、彼等が意識しているという点ではないが、この秩序の矛盾点をすてについているのではないかという点である。その意味で著者が「士族反乱と自由民権に共通な情念の核は、中央への早激的な権力集中心が、人

民から自由の観念を含む土着の思想を強制的に剝離していくことへの抵抗であった。」とし、秩序の定式化に対して「土着の思想」をとり上げるのは、「近代」がとり残したものをみつめなおそうとするものに他ならない。さらに著者は、一方で敗亡者の呻きや叫びを聞くことによつて「混沌」の中で見失われた「紐帯」を彼等の情念から再発見しようとする。そして私達は「歴史が勝者の手で歪曲される」ことを実感として理解できる。それは一度敗北を余儀なくされた者たちの共有しうる情念である。それ故日本近代が切りすてていったものは「怨恨」として生き流れており、それらは「敗亡者の復讐要求にとどまらず、歴史自身の自己修正運動」とさえ言える。また敗亡者たちはある意味では、知識人の前身としての諸矛盾を体現している。敗北者たちをついたが、そこから新たな団結・紐帯を生み出すことはできなかった。

しかしこの両者はまったく切り離された関係にあつたわけではない。日本民衆は横死したり憤死したりした者のたたりをおそれて、これを神に祭るという伝統的な御霊信仰を持っていた。今は、形式化したとはいへない。この信仰の心情は失われてしまつてはいない。そしてこの信仰形態の中には敗亡者と民衆たちの関係が

表現されている。民衆たちはいはば独自の論理で、敗亡者に座をあたえ、勝者の思いあがりやを止せうとしたのである。この日本民衆のように敗亡者の情念と怨を共有し、共鳴する者のみが「近代」の空虚をつき、幻想をあはくことができるのである。

たとえば、「東北地方のある県の歴史に、日本の敗戦こそは、東北にとつて真の近代史の夜明けであり、それまでは、薩長閥の歴史にすぎなかつた。」とさえ記されていた。著者はこの県史の自國の敗戦に喝采をおくる日本人の復讐心の強さに根深いエネルギーを感じている。私達はさらにこの民衆達の論理と心情を見ていこうとおもう。

〈洞窟の論理と民衆〉

「洞窟の論理」とは合理主義では不可解な世界のことである。「私達の眼に見える日本の外がわに、いやむしろその内がわに見えない日本が実在する。それが迷路と筭の充満する洞窟」である。

私達は「洞窟の論理」を天皇制と民衆の関係とみることができる。「近代天皇制が確立するまで天皇の地位は零に等しなかつた。」「政治的あるいは経済的に力をもちた天皇の、虚体ともいうべき洞窟からどうして実質的な権力を殺す

力が生れたか……」その権威は「無力から出発していた。無力であつたからこそその権威は絶対であり、それを相対化することのできる至高な存在であり得たのだ。」

このよつた天皇制の独自のあり様は、著者によると「人間としての平等という観念を上層階級がもつというよりは、下の階級のものももち」「力の論理の否定が力の論理に含まれなにかぎり、それが社会的な有効性をもたなかつた」ことに起因するとされる。ここでは階級対立はむしろ除へいされ支配関係はいまいとなる。この洞窟の論理は、合理主義にとつては不合理であり、神秘主義であるかもしれない。

しかしこの精神は、アジア日本における民衆の生活そのものからじみ出たものである。それらはむしろアジア的生産様式からくるものであろうし、共同体生活の知恵ではないだろうか。またそれらは支配・被支配関係における、人民の身の処し方として、それら生活形態にまで昇華されたものであろう。著者はそれを「能」の中に見、また彼が接した「老農民が息子の戦死という際ぞその悲しみの耐え方」これを象徴的に見る。

私達は、ここでは洞窟の論理の世界の民が、息子の戦死に対する悲しみと怒りの表現のその独自の仕方を見た。さらに

私達は、そのような民が他方で生活者であり、日常のサイクルを放棄しない人達であることを知っている。著者はその存在に「無告の民」「近代の暗黒」という文章で照明をあてる。

△ 常民・と知識人▽

「無告の民」は、「自分の苦しみを告げ知らせる」ことをしない。そして「訴える」を知らぬよるべない小民」である。明治まで文字を知らぬ民衆達は、文字とは無縁の伝承文化を生み出した。

彼等は（他）に押しつける文化をもたず彼等のは「受けつぎ語りつぐ文化」である。日本民俗学が「常民」という概念で対象化しようとしているのはこのような民である。私達には、それではいい何故に「無告の民」が問題なのであるか。

「民衆の世界では、生活と遊離して自律する善悪の観念は存在しない……。生活者である民衆にとつては、自分の生活を守るのに有利なもの善であり、不利なものは悪である。これは民衆には自明の理である。善悪を判定するこの単純明白な基準は、歴史以前から今日まで民衆の中に、一貫して不変である。」

このような民衆像にとらわれざるを得ないのは知識人の永遠の問題かもしれない。

い。それは、観念の世界の存在構造そのものに起因しており、存在から切り離された者の普遍性への追求であらう。著者はここで「政治が見捨てられている無告の民の中に単身はいっていかん決意」をもった「負の前衛」たる知識人と正の前衛に問題性を語らせる。「正の前衛」が民衆の先頭に立つて、支配権力の強圧と戦う政治的な人々であるのに対して、負の前衛は、隠れた民衆の中に潜する。彼らはいわば無私となることよって民衆の鼓動に耳をすましていく。

日本の近代において、一方の知識人達が近代化をと見え、西欧の市民主義、民主主義を引っぱってくることよって、この想定された市民像を押しつけたにもかかわらず、民衆達はかたくなに自らの生活に固執してきた。知識人達は、自らの観念の抽象的普遍性を組織化しようとするのである。日本近代が空虚なのはこの抽象的普遍性か民衆の心情と論理をすくい上げることができなかったことに起因する。そしてこのような知識人達の身がたつては、無告の民のしべ返しを受けてきた。とりわけ左翼運動がその典型であらう。日本共産党史のジグザグはこのことをよく示している。「民衆」「人

民」を奉るか、逆に「バカ」にして自分たちだけで壊滅するかのであった。

近代における知識人の問題は彼らが近

代化の過程の中で農村共同体から切り離され、そこで「横の連帯」という紐帯を失ったとき、私（資本主義的自我）を獲得したが、それは資本主義が要求する「私人」にしからず、「交換」で完結される関係への転化—知識の切り売りをする—でしか知識人が成立しないことである。知識人達は当然この「私」であることに耐えることはできない。彼等はある普遍性の中でしかくらすことはできない。彼等は観念の中で「現実」からの衝動をうけつて世界をつくり上げるのである。

知識人という不安定な存在は、彼等の意識の片すみにある共同体的な紐帯に観念的に同一化することよって、よりそれらを絶対化する。アジアの合理主義では理解できない論理と心情を対象化することなく同一化し、絶対化する。たとえば、「日本主義」「農本主義」がそうである。近代主義者達がとりわけ振舞はげしいことを知っておりてもムダではない。私達は、常民への照射を試みるとき、その常民はあくまで私達の対象である。「負の前衛」たちは孤独でなければならぬのである。私達はこのような知識人—「負の前衛」たちがどのようにして、常民に接近するのだろうかという点を見ていこう。柳田民俗学と折口民俗学はその一典型として私達の読み込みをゆ

るしているように私達には見える。少なくとも著者を通して民俗学はそうである。

△ 民俗学と常民▽

私がかつとも興味をもつのは、民俗学が物質よりも意識を追求しており、しかも民衆社会の意識・生活意識の根底にあるものに光をあてていることである。そしてそれを、知識の次元において、民衆の世界を転向不能の地点までおりてみる仕方でもやっている。日本近代—現代の意識世界が古来からの意識の片鱗と資本主義成立からの価値観が錯綜しており、もし「意識における下部構造・上部構造がある。」とするならば、農耕社会—共同体的意識は単に片鱗としてではなく、下部構造として、意外なところで（現代）をも動かしている。

現代の私達のもつ意識は、発生期からの営為を、体験を含んでいるのである。これらの意識を持っていると言おうのは私達の実感としてである。その実感として私達の意識を追求していけば、私達の過去が関与した、自然・人間自身の関係は明らかにならぬだろうか。さらに類的な関係はどうであったのだろうか。たとえば、（伝承）が後世をも左右するところがあるのは、それが私達の意識の奥で再生されているからに他ならないからで

あらう。

著者が「柳田民俗学は（現在）から出発する」とい、また折口民俗学は「実感・直覚」から出発するとうとき、自己意識の重層的な構造（二つ）を分析するという方法をとっていると私は推測している。残念ながら、柳田・折口自身にわけ入ったことの少ない私にとっては、これ以上言うことはできない。だが少なくとも著者を通して日本民俗学の方法はそういうふうに見える。

先に私が「常民への照射はあくまで私達の対象である。」と言ったのは、また「知識の次元において転向不能の地点にまでおりてみる。」というのは、知識人

の自己認識の究極として現われる対象としての「常民」であるということである。このことが私が言った他方で知識人のことである。このような知識人は民衆の心情と論理をすくい上げうる唯一の人達ではないだろうか。

ここまで言うと日本民俗学へ柳田・折口を讀み込みすぎたということになるかもしれない。確かに日本民俗学は「天皇制神話の正統性主張の破砕をやったかもしれないが、同時に天皇制国家の承認もやった。」

柳田・折口民俗学は戦時にも神がかりになることはなかった。それはこの民俗学がすげぬけて、日本の土着信仰を対象

化しており、天皇制神話を相対化していたからである。しかし日本の「常民」無告の民」達は、積極的ではないにせよ、「皇民」として土着信仰を天皇制神話に転化させたことも確かである。

「柳田は「常民」に自らの規範を見出しようとした」が、その常民を追求した上で、「日本人は事大主義だ」となげいたと伝えられている。私達には「常民」という概念もあくまで抽象化されたものであり、普遍的なものではあり得ない。

私達は著者とともに次のように言わねばならない。「柳田民俗学が郷愁の学問隠れ里の学問にとどまるかぎり私には無縁である。両手を擦りあわせて火きり杵

〈お詫び〉

本誌第二号に(注)をのせた講演記録、「経済学批判と弁証法」について、統稿がおくれ、読者ならびに編集者に多大の御迷惑をかけて、申しわけなく思います。実は、講演の後半部分は論点のツメが甘く、相違の加筆補充を試みてみましたが、残念ながらなお、活字にするには耐えません。

まことに勝手ですがこの稿は、問題開示にとどまる「未完」のままで中断し、

(経済学部助教授・細見孝)

をめぐむように、時代の烈しい燃焼の場に彼の学問をひきずりださねばならぬ。」と。

評者は社会学部四回生
(1972年・じゅんいちろう)

△冬樹社・一〇〇〇円▽

〈次号予定〉

(25号—1月発行)

■書評

◇恍惚の人

◇金鶴泳

■私の研究ノートから

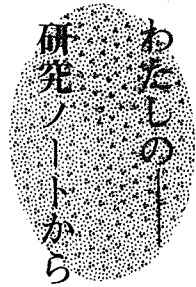
◇「一ゲル語で(Ⅳ)

◇日中文化関係史の一面(Ⅶ)

日中文化関係史の一面

(VI)

増田 渉



象山と海舟

佐久間象山の「省覧録」には勝海舟の序文があって、それによると「省覧録」は象山が厄に遭ったとき(つまり来航中のペリーの軍艦で、安政元年アメリカに密航しようとして捕えられた松陰の行動と関係があったとして、象山も捕えられたが、そのとき)獄中で執筆したもので、篋底に藏していた。息子の恪(二郎)もまた蒐集したが、流離顛沛の間もこの遺稿を守った。このごろ(これを)携えて余(海舟)に示したので、資を助けて上木する云云といっている。海舟の妹が象山の本妻であったし(序文に「余の親姻

象山翁」という)、そんな関係もあって海舟が資金を援助し、明治になって、はじめて刊行されたものだ。この序文で海舟は、象山を「開化日新の説を唱えた」先覚者としてはめているけれども、カミシモを脱いだところでは、「学問も博く、見識も多少持つて居たよ。併し、どうも法螺吹きで困るよ」(「氷川清話」)と批評している。姻戚だから、わざと不遠慮なことをいったのかも知れないが、しかし象山が「聖武記」や「海国図志」についていっている言葉のなかには、大言壮言癖のようなものがわれないこともない。

「聖武記附録」と松陰

松陰は魏源をとて熱心に勉強していた、当時の日本の代表的な海防論者たちについて、魏源の口真似だといったりしているが、また手きびしく魏源を語聞したりもしている。

嘉永三年(一八五〇)の松陰「西遊日記」(九州旅行日記)に、九月二十五日平戸で美山佐内(平戸藩士)を訪ね、「聖武記附録」四冊を借りたと記しているが、この四冊本の「聖武記附録」は日本の翻刻(木活字)で、私もいま所蔵するが、翻刻者の氏名はない。木活字本だから訓点も入っていない。松陰がはじめて「聖

武記」を見たのは、あるいはこの翻刻本の附録部分であったのではないかと思う。というのは、その日以後松陰は殆ど毎日、真るように「聖武記附録」をよみ、また抜き書きしているからだ。

九月一日に葉山宅で「聖武記附録」を借りたことを日記にかいているのだが、翌二六日にも「又葉山に至り「聖武記」を讀む」とかき、一七日にも「葉山に至り、「聖武記附録」を讀む」といひ、その中の佳語」として、同書のなから彼の氣に入つた文章を抜き書きしている。一八日にも同書を読み、「佳語」を抜き書きし、一九日にも読んで抜き書きしている。二日から「阿芙蓉齋聞」(奥谷岩陰編)を借りて、この目録を詳しく写し、また抜き書きをしているので、「聖武記附録」抜き書きのことはちょっと停止のようだが、二四日、二五日は平行的に「聖武記」の方も読んで、抜き書きしている。二六日からはまた「経世文編抄」(翻刻本、後述する)乙集を借りてその目録を写し、また抜き書きもしているが、二八日には、「阿芙蓉齋聞」七冊卒業(誦了)す」といっている。因みに「阿芙蓉齋聞」は写本で伝わり、書名を知るだけで私は未見だが、この松陰の詳しい目次と抜き書きによつて、私はこの書の大體を知ることができた。

「阿芙蓉齋聞」は卒業したが、「聖武

記附録」の方はまだつづいていて、一〇

月二日にも「葉山にて『聖武記』を讀む」といっている。そしてこの日に「

齋先生抄書ありやと問ひしに、鑑軒(葉山佐内の号)答へて云く、聞かず、唯毎書櫃外書入に張紙等甚多し、又処々に附紙をなして入用の処を標せられしとなり、因りて鑑軒の書をみるに亦多く之に倣ふ」と記している。佐藤一斎(幕府の儒官、昌平塾教授)も書き入れをし、附箋をして「聖武記」を精読していたことが知られる(葉山左内は佐藤一斎の門人)。六

日にもまだ「葉山にて『聖武記』を讀む」がつづいて、いつ卒業したものかハッキリしないが、この日「先哲叢談」を借りて、以後「叢談」の抜き書きがはじまつて、以後「この旅行のとき、松陰は長崎で、高野長英の『夢物語』や、アヘン戦争のことを書いた『隠蓑録』などとともに、清の陳炯の『海國聞見録』を借りるが、例によって『海國聞見録』の目次写しと抜き書きをしている。この書は編刻されたことはないが、大庭氏編『江戸時代に於ける唐船持渡書の研究』によると、『海國図志』などと同じくらいの部数が輸入されている。この書もまた松陰に海外知識を与えたものといえよう。私も一部(道光三年重刻)を所蔵するが、冊本で、一冊は文章、一冊は地図になつてゐる。

「新論」「籌海私議」批判と魏源

翌、嘉永四年(一八五二)八月、江戸から叔父の玉木氏に宛てた松陰の手紙に「八月二日朝、山鹿会、夕方『聖武記』を會読にて薄暮朝陽」とある。有志とともに「聖武記」を會読し、やっぱり研究をつづけているのだ。安政元年(一八五四)二月、家兄に宛てた手紙には、会沢(正志斎)の「新論」や奥谷(宥陰)の「籌海私議」がいま評判だが、「この二人に軍艦はどうして進めるのかと問うても、その作り方は知らず」と、議論や意見だけでは、實際の用には立たないことを先

ず批判し、その後、奥谷宥陰の上書を見たが、といて、それに軍艦や大砲は蘭人から買入れるという策をのべていることを取りあげ、「造艦に購艦に如かず、造砲に購砲に如かず」といっているが、これは清人魏源の「聖武記」のなかにいっていることだ。(中略)今人の購求の策は、みな魏源の口真似である」とけなす。このような松陰の非難はともかく、このような指摘の裏には、当時、魏源が広く読まれ、研究されたいたことを物語っており、そしてその政策ない用兵方略なりが、切実な日程に上つてゐる海防問題に係わるものであつたために、かなりの影響をあたえたことが知られる。

だが魏源の言説をとらえて、反対して

いるところもある。その「野山文稿」のなかに、「讀出眞囑頓評判記」(安政二年)という漢文があり、次のようなことはいっている。(原漢文を意訳する)「清人魏源はよく外国事情を論じるが、(以下『海國図志』卷二『籌海篇』(三)『議戦』の記載を指している)、ロシアはアメリカ、フランスとともにみなイギリスを憎んでいるから、水陸の援助を受けるに よるしい」といって、(それについて)古いこと新しいことを引用し、ハッキリ抛りどころをあけてゐる。だが自分の見るところでは、これは一を知って二を知らざるものである。」

と、松陰自身の見解を次のように述べる。凡そ夷狄のやり方は、利を見て義を見ない、利があれば敵とも同盟し、同盟しても善ならば敵となるのは常のことだ、といひ、「いまこの記(『ロンドン評判記』)を讀むと、ロシアとトルコが開戦し、イギリス、フランスが一しょになつてトルコを助けている。だからロシアとイギリスが憎みあつてゐることは、魏源の考えるとおりだが、しかしイギリス、フランスが連合していることは、魏源の考えを外れない、しかもアメリカがどう出るのかも分らない」と、当時の世界情勢の分析で、魏源の見とおしが当っていないことを指摘している。

松陰と太平洋天國の乱

また松陰は「魏源海篇」(『海國図志』の首篇)という文章で、もと根本的といえる疑問を提出している。安政二年五月のもので、漢文で書かれてゐる(『野山文稿』所収)。そのなかで松陰は「籌海篇」の「議岸」「議戦」「議款」はハッキリ壺を射たもので、清國がこれをよく用いたならば、もちろんイギリスを制することができたのみならず、ロシア、フランスも敗ることができた、と大いに推察しながら「たに疑ふ」といって、

「この書が出版されたのは道光二十七年(一八四七)だが、(それから)また三、四年たたないとき、広西の民變(太平天国革命のこと)が起り、八省に及ぶ擾乱になり、禍いは一〇年もつづき、ついに北京も危い状態に停止するところを知らない。だから清國が憂慮せねばならぬ」とは、外夷ではなくして内民のことである。どうして魏源は一言もこれに及ぶことがないのか(原漢文意訳)、国内の大事件、大混乱をはらんだ内部状況について、この書のなかに何らの考慮も見られないことに疑問を投げかけるとともに、たしなめる口振りである。というのが松陰は、当時まだ「太平洋天國」の事件に深い関心をもつていたので、安政二年(一八五二)二六才のとき、野山獄

中で「清国威豊乱記」と題し、ペリーの軍艦に乗り組んで日本にきた「清人が伝えたなまなましい「太平天国」の情報（起りとそれまでの経過）を写本から翻訳している。ただ松陰はその原本について「何人の著者所なるを知らず、又書名あることなし」と例言に記しているが、私がかつて自分の所蔵する写本類などによって、松陰も她の稿本の筆者とその伝来について、やや詳しく考証したことがある。ついでにまたその松陰の翻訳が、今日から見て凡そその程度のものであったかについても、少し検討を加えておいた（『鳥居教授華甲紀念論集』所収）。

なお松陰が「この書が出版されたのは道光七年」と記しているのは、当時日本に輸入された「海国図志」が同年出版の六〇巻本（私のものもこの影印本）であったことを示している。「図志」の原刻は五〇巻で、道光三年（一八四二）に出ている、それを増補したのが六〇巻本である。後さらに咸豐二年（一八五二）に増補を加えた一〇〇巻本が出ている。

「海国図志」と「四洲志」

安政元年一月、松陰が家兄に宛てた手紙に「『海国図志』一卷、先日拝用分写す」といい、次に「さて林則徐、魏源、西人共、有志の士にて、殊に彙行書（横

文字の書物）に通じたる人なり。如何にも（わが国の）有志の士に彙行書を勧め、かかる好書著述させ度（き）ものに御座候、尊意如何」と記している。好書として「海国図志」に感心するとも、わが国の有志にも横文字の勉強をすすめて、このような好書が著述されることを切望しているわけだ。ただ松陰が林則徐や魏源を、横文字に通じた人のように思っているのは、思いちがいである。「海国図志」のインド、ヨーロッパ、アメリカなどの部の巻頭に、「歐羅巴人原撰、侯官林則徐訳、邵陽魏源重輯」とそれぞれ標記されているので（単に「邵陽魏源輯」とした巻もある）、これを見て、林則徐や魏源が外国文に通じたと思つたものようだ。

「海国図志」の基礎になつたものは林則徐訳の「四洲志」で、魏源は「図志」序文の冒頭に「『海国図志』六〇巻は何に拠つたかといへば、一に前西広総督林尚書訳すところの西夷の『四洲志』に拠り、次に歴代の史志および明以来の島志および近日の夷國夷語に拠る」と記している。だから「海国図志」のうち、「歐羅巴人原撰、林則徐訳、魏源重輯」とする部分は「四洲志」に拠つたものであることが知られる。「四洲志」はいま「小方壺番輿地叢鈔」の「再補編」に入っているが、この「叢鈔」の特徴である

抄略本であるにしても、一度「海国図志」の林則徐訳の部分とつき合わせ比較してみようとなつてから思いながら、「輿地叢鈔」のこの編を持たないので未だに果さずにいる。従つてその序文なども見ていないから「四洲志」との関係について、いま私は何もいうことができない。

ただ林則徐が、直接訳したのではなく、誰か外国語に通じる者に命じて訳させ、名前だけが林則徐になっていると考えべきだ。中国の大官の著作は、大抵このようなものであつたとされるが、とくにこの場合は、林則徐が外交軍事の最高責任者として外国と対抗する上で収集した「情報」の一種だと考えるべきだ。魏源も「聖武記」（巻一〇）「道光洋艘征撫記」上）にちよつとふれていて、

「林則徐は去年広東にきてから、日々人を使つて西事（西洋事情）を探偵し、西書（西洋書籍）を翻訳させ、またその新聞紙を購入した」と記している。「魏源重輯」というのも、序文に「近日の夷國夷語」によつて再び補つたものであり、「夷國夷語」も魏源の側者による提供資料を利用したと考えるべきである。林則徐や魏源の年譜、あるいは彼等自身の書いたものを見て、彼等が欧文を学習したという形跡は見当らない。ただこの書が「彙行書」から多く材料をとつていることは、魏源の序文に「何を以て（こ

の書か）昔人の海国の書と異なるかといへば、それ（昔人の書）はみな中国人が西洋を談つたものであるのに、これは西洋人が西洋を語つたものである」からだと記していること知られる。

（ 文学部教授
ますだ・わたる ）

原稿募集 編集者募集

私達は論争の場を広範囲なものにするために、「書評」の定期月刊化、映画会、討論会、講演会等の設定をはかつてきました。そしてこれらの実績を批判的に総括する中から、更に一層鋭く、時代の本質を斬り取る作業をするべきであると考え、そのためにもあらゆる領域からの原稿をもつと募集したいと熱望しております。投稿大歓迎です。なお編集スタッフについても、より強化し、書評運動の自律的展開をはかつていくつもりです。編集を希望する方はぜひ一度書評委員会までおいで下さい。

で詣るゲルへ

III 肇 中 塾

わたしの
研究ノートから

ベルン（つづき）

ベルンに着いた翌日はたいへんな雨になった。窓を叩く雨の音を賞し、これでもしK君が来てくれなかつたら困ったことになるがと思いつながら床を離れた時、彼から電話がかかって、これから家を出るから十時半頃にはそちらへ行けると思うという。彼の住んでいるソメ・デ・ウイニユというところはおそらく水力発電所のある山峡の寒村なのだろう。（彼はオーストリアのグラーツ大学を出たダム技師だから）地図にも出ていないからどこにあるのか判らないが、ベルンから二〇キロくらいは離れているらしい。ともかく長女と朝食をすませてロビーで彼の到着を待つことにしたが、約束の時刻になってもいっこうに姿を現わさない。一時間ほど経って、心配だから電話してみようかと娘と話していると、ドアを

開くようにして彼の長身が飛びこんで来た。一別以来の挨拶もそこそこに、スイス政府の傍に停めてあった彼の車に乗って出かける。

車は降りしづく雨の中をベルンの市街を抜けて、なだらかな平原に入る。道の両側には畑や果樹園や牧場が連なり、ところどころにかなり深い森がある。遠くに高い山があるはずだが、雨に視界を遮ぎられて見えない。牧場や畑の傍にスイス独特の軒の深い大きな農家がある。そういう景色の中をどこまでも続く一車線の田舎道を、私たちの車はひたすら走り続ける。ふと私は速度計を見て驚いた。針は二二〇キロを指している。急にこわくなって車のスピードを落とさせようと思つて、K君に尋ねる。「この道路での許容最高速度はどれくらいなの。」「ウンベンシュレンクト（無制限さ）。」事もなげに答えて彼はそのまま走り続ける。一時間ほど走ってエムラッパに着く。この小さなレストランで腹ごしらえをした後で、再び車に乗って一〇分も走ると、目的地のチュッダである。

目指す癩癩病院は周囲の家々に比べてひとときわ大きいので、ひとに尋ねるまでもなくすぐに判った。これがつまりヘーゲルが家庭教師をしていた名門シュタイガー家（この家柄はこの土地の出身であったから、シュタイガー・フォン・チュ

ッダと呼ばれた）の別荘であり、おそらくその領地を管理する場所でもあった。そして今は上に記したような特殊な病院となっているわけであるが、三階建の外観は全く「お屋敷」という感じで、近代的な病院の趣は無い。ここでも訪問の約束は前もってとっておかなかつたが、刺を通すと幸いに病院の管理責任者であるJ氏がいて、事務室で早く会って、私の用件を聞く親切にさまざまの話をしてくれた。かなり私が見聞の強いスイス・ドイツ語で、私が判りにくうな顔をするたびに、K君が標準ドイツ語に直してくれるので助かった。J氏の話によると、この邸宅はもともと十七世紀に建てられたもので、最近、とくにここを病院として使用するようになってから、ほとんどすべての個所に手が入られ、改造されたが、二室だけは旧態のまま保存されているという。そして、一八世紀末（というからヘーゲルが家庭教師をしていた頃だろう）の荘園の地図を見せて、当時の様子を想像で語ってくれた。その後で当時のまま保存してあるという二つの室に案内してくれた。そのひとつには祭壇があって、明らかに家庭用の禮拜堂（ハウス・カペレ、ヨーロッパの貴族は概ね自邸内に自分たちの禮拜堂を持っていて）であつて、これは今でも入院患者用の禮拜堂として用いられている

という。もうひとつの部屋はJ氏による
と何に使ったかわからないという。しか
しベルに花模様があつて、全体として
かなり華やかな（もちろん今ではすっか
りくすんでいるが）ところから見ても、家
族のだんらん室か舞踏室ではないかと思
つた。ヘーゲル青年の部屋などというも
のはもちろんもう残っていない。

J氏がウァーン・ケラーを見せるとい
う。（実はこれが自慢の種であることが
後で判つた。）そこへ行くためにいつた
ん庭に出る。雨は小降りになつていた。
J氏が「あれをごらんさい」と指さす
ものを見ると、正面一階のヴェランダの
鉄格子に鹿の飾りがついている。これは
私も既知に知っているシュタイガー家の紋
章である。地下室へ入ると、年代を経て
真黒になつた巨大な樽（もちろんぶどう
酒のための）がいくつも並んでいる。プ
レーメンのラーツェームにも、ハイデル
ベルクの城内にも、こういう巨大な樽が
並べられているが、私たちはこういう樽
のひとつひとつにもヨーロッパの歴史と
いうものを感じずにはいられない。

「どうです。ここで作つたぶどう酒を
お試しになりませんか。」「それはどう
も御親切なことです。」「待つましたとほ
かりにK君が返事する。そこでJ氏に招
き入れられたのは、病院の建物の二階に
あるJ氏の私宅である。J夫人と令嬢に

も紹介される。初めには白ぶどう酒を、
後では赤を注いでもらふ。私にはよく判
らないが、K君がしきりに「うまい、う
まい」と感心するので、私も同じことを
繰返す。問はず語りにJ氏の言うところ
では、このぶどう酒はローザンヌの品評
会で金メダルをもらったものだそうであ
る。

J氏の話では、彼自身もこの家と大哲
学者ヘーゲルとの関係は知らなかつたの
だが、何年か前に日本人が訪ねてきて、
初めてそのことを知つたという。そして
私ほこを訪れた三番目の日本人で、日
本人がこういうことに関心が強いのは驚
きの至りだが、それにひきかえ自分の知
つてゐるかぎり、ドイツ人が訪ねてきた
ことは一度もない、そうである。また数カ
月前にスイスのテレビ局がこの建物の録
画をとりに来たので、今年がヘーゲルの
生誕一〇〇年であることを知つたが、そ
の録画はまだ放映されないと言つた。
午後四時頃になつてJ氏に手厚く礼を
述べて、若いヘーゲルの遺蹟のひとつを
去る。帰りの車の中で私は先刻の酒杯の
ぶどう酒が頭にまわつてきたので、車
のシートの背を倒してもらつて欲も得もな
く眠りこんでしまふ。ベルンに着くまで
何も知らなかつた。ベルンの街にはアー
ケードが多い。そんなアーケードのひと
つにあるカフェで酔さましのアイスクリ

ームを御馳走になつた後で、君の援助が
無かつたこの私の「ヘーゲル詣で」の
ひとつの重要なポイントを果たすことが
できなかつたであらうと、心からの感謝
を述べてK君に別れを告げる。

その後もしばらく娘とアーケードの街
でウインドウ・ショッピングをやりなが
ら、ふと見つけた本屋に入つてこの日の
ための絶好の記念品を手に入れた。ミュー

ンスター大学のヨアヒム・リッター教授
が書いた「ヘーゲルとフランス革命」の
ズーアカンプ新書版である。この書物邦
訳も「あはれ」は私はずっと前にひとから借
りて読み、ヘーゲル研究における名著で
あると感じたので、何度も注文してみた
のだが、どうしても入手できず、実はK
君にも捜してもらつたがむなしく、版元
からは絶版であると知らされていた。そ
れで今度ドイツへ来たのを機会に、眼
につく新本屋、古本屋のごとくで尋ね
てまわつたのだが、どうしても手に入ら
なかつたのである。こうしてなれば諦
めていた書物が、私の巡礼の道すがら、
ヘーゲルにゆかりのあるベルンのふと立
寄つた本屋の片隅で私を待っていてくれ
たことは、まことに望外の歓びであつた。

ハイデルベルク

チュニグを訪れた翌朝、ちよと日本

の梅雨空のような、低く垂れた雲から時
折り激しく雨の降るなかを、私と娘とは
ベルンを発つてバーゼルでちょっと下車
した後、ドイツに入つて午後二時頃には
ハイデルベルクに着いた。駅の案内所で
紹介してもらつて、ネッカー川の岸辺に
ある安宿の一室に旅装を解く。

ヘーゲルは一八一六年にニュルンベル
クからこゝに来て、初めて大学の正教授
の地位に就いた。そしてこゝに在る間に
例の「エンチクロペディー」という書物
を書いて、世にヘーゲル哲学体系と称せ
られるものの全貌を初めて世間の前に示
したのである。（もちろん「エンチクロ
ペディー」はその後ベルリンで改訂され
ているが小さくともその原型はハイデル
ベルクで作られたわけである。）しかし
彼は二年後の一八一八年にはもうベルリ
ンへ行つてしまふから、この土地はヘー
ゲルの生涯のなかでは、バンベルクとな
らんで最も短い滞在地であることにな
る。おまけに彼は一八一七年の秋（つまり
ハイデルベルクへ来てから一年後）には、
既にプロイセンの文部大臣アルテンシュ
タインからベルリンへ来ないかという招
きの手紙をもらひ正式に交渉を始めてい
るので、ヘーゲルとハイデルベルクとの
結びつきはますます稀薄だという印象を
持たざるを得ない。

といつてもヘーゲルはハイデルベルク



が嫌いだ。たつたわけではないらしい。彼は手紙のなかでこの土地の自然の美しさと人情のこまやかさを書き送っているからである。ただヘーゲルがここに長く留まることができなかったのは二つの理由がある。私には思わぬ。ひとつは彼の天性であり、もうひとつは彼の野心である。つまり第一に彼は生れながら都会的な人間だった。彼の生れたシュトゥットガルトは公国の首都として大都会であり、父は高級官僚であったので、彼は幼い時から都会的センスを身につけていた。これに比べるとハイデルベルクは、極端に言えば、河と山と大学と城しかない田舎である。そこには田舎にありがちな一種の偏

狭さがあった。これが大学人の人間関係にも反映せざるを得なかった。そして第二にハイデルベルクはその大学の古さと名声にもかかわらず、ドイツ全体の文化の中心からは遠く離れていた。バーデンという領邦もドイツの諸領邦に冠絶しているわけではなかった。だからヘーゲルが彼の学問的であると同時に世間的な野心(ヘーゲルにはこういう俗物性があることは否定できない)を満たすために、ハイデルベルクはけっして理想的な場所ではなかった。

(文学部教授
なかの・はじむ)

編集後記

電車の中で、坐っている人達の格好をメガネ越しに見ていると、各人それぞれ多種多様な新聞、雑誌、小説等を手にし、読み耽っている。わずかに三〇分位の通勤、通学に、揺れるもとで細かい文字に目を強ばらせるという努力。ふと目を上げると、朝の陽に輝く街の景色が、眩しく窓に展開されて、実に気持ちの良いものを、自分の城の如くに、書物に没頭している。これは、あらゆる情報が乱飛している現代では、一週間も外界との伝達を断ち切ると、グアム島の横井さん程ではないが、人とのコミュニケーションに支障をきたすにちがいないということから来ていると思う。歌謡界の〇〇大賞、総選挙、円再切上げ……。時間との競争のこの忙しい社会では、日々のニュースや、マスコミで話題のベストセラー等を読むのに、電車の中や、トイレの中までさえも神経をすり減らすのは必要に迫られており、仕方がないということなのだろうか。しかし、読者の一員として一〇分でもいい、静かにホームこたつで暖をとりながら、書物に接することが出来れば、なんと素晴らしいことか。